



Data

監督・脚本: リン・ラムジー
 原作: ジョナサン・エイムズ
 『ビューティフル・デイ』
 ハヤカワ文庫

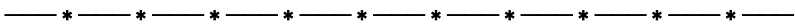
出演: ホアキン・フェニックス / ジュディス・ロバーツ / エカテリーナ・サムソノフ / ジョン・ドーマン / アレックス・マネット / アレッサンドロ・ニヴォラ

👁️👁️ みどころ

近時の邦画はわかりやすさを全面に押し出すため、セリフ過多、説明過多の傾向が強い。そのためテレビドラマとの区別が薄くなるが、逆に「劇場版」の営業まで・・・。

カンヌで二冠、そしてカンヌを騒然とさせた本作はそれと正反対で、セリフも説明もあえて最小限に！そのため、各シーンの理解と解釈には集中力が必要に・・・。

物語は『タクシードライバー』(76年)を彷彿させ、インパクトもよく似ているが、本作の“ワル”は一体誰？クライマックスに向けては、そんな闇の部分と、韓国映画の名作、『オールド・ボーイ』(03年)を彷彿させる衝撃的なハンマー・アクションを堪能したい。



■□■カンヌ映画祭騒然！それは一体なぜ？■□■

怪優ホアキン・フェニックス×鬼才リン・ラムジー監督×音楽ジョニー・グリーンウッドの組み合わせという本作のチラシには、「カンヌ映画祭騒然！」の文字が躍っている。そして、本作でほとんどセリフのない孤独な主人公ジョーを演じたホアキン・フェニックスは男優賞を、孤独な中年男と孤独な少女との奇妙な縁をテーマとした本作の脚本は脚本賞を受賞している。たしかに、本作の脚本とホアキン・フェニックスの演技は素晴らしいが、私が思うに、本作のサスペンス性を盛り上げているのは音楽の他、クローズアップの手法だ。私は、デンマークの女性監督ササンネ・ピアの『ある愛の風景』(04年)、『シネマ16』70頁)、『アフター・ウェディング』(06年)、『シネマ16』63頁)、『悲しみが乾くまで (THINGS

WE LOST IN THE FIRE』(07年)、『シネマ19』245頁)、『真夜中のゆりかご』(14年)、『シネマ36』151頁)、『未来を生きる君たちへ』(10年)、『シネマ27』177頁)等でその手法が多用されているのを見てびっくりしたが、それは本作も同じだ。

ホアキン・フェニックスは、『グラディエーター』(00年)と『ザ・マスター』(12年)、『シネマ30』213頁)でアカデミー賞助演男優賞、『ウォーク・ザ・ライン/君につづく道』(05年)、『シネマ9』91頁)でアカデミー賞主演男優賞にノミネートされた個性派俳優だが、“元軍人で、殺しも厭わない冷徹な人探しのプロ”という本作の主人公ジョーの異色なキャラに彼の演技力はうってつけ。しかして、ジョーはなぜ天使のように愛らしくも自分と同じように心の壊れた少女ニーナ(エカテリーナ・サムソノフ)と出会い、いかなる縁を結んでいくの・・・？

本作とよく似た物語だった、マーティン・スコセッシ監督の名作『タクシードライバー』(76年)では、若き日(?)のロバート・デ・ニーロと少女時代のジョディ・フォスターの熱演が光っていたが、それは本作も同じだ。さあ、自分の目で「カンヌ映画祭騒然！」の意味をしっかりと確認しよう。

■説明もセリフも最小限！こりゃ近時の邦画と正反対！■

本作については、ネット上で絶賛する声が目立つ。それは「この衝撃、どう表現すればいいんだ！？とにかく強烈に“脳内に残る作品”」「こんなにゾクゾクする映画と出会ったのも久々だ。世の中には『一から十まで説明してしまう映画』が溢れているが、本作はまるで逆」等だ。新聞批評でも「説明的な要素がほとんどない脚本、アップを多用した思わせぶりの撮影、短いシーンを積みかけるような編集。そこに回想シーンも加わるため、一瞬でも気を緩めると、置いてけぼりになる。見る人の読解力と集中力を試すような、高度でプロフェッショナルな映画である」と、物語よりもその製作手法に重点を置いた好意的な(?)批評が目立っている。

私はNHK大河ドラマ『西郷どん』を毎週見ているが、これはテレビドラマだから、途中トイレで抜けると部分的な感動シーンは見れなくなるが、それでも全体としての物語の理解には支障がないように、とにかくわかりやすく作られている。近時の邦画には、たとえば水谷豊が主演する『相棒』シリーズや阿部寛が主演する『新参者』シリーズのような、テレビの人気ドラマを映画化した「劇場版」なるものがあり、それなりにヒットしている。また、若者向けの原作モノに美男美女を起用し、原作通りのわかりやすいストーリーを、ポップコーンを食べながらの若いアバックに、わかりやすく提供する映画もそれなりにヒットしている。さらに、現在公開されている山田洋次監督の『妻よ薔薇のように 家族はつらいよⅢ』(16年)はシリーズ3作目だが、事前の勉強はもちろん不要、パンフレットを購入しての復習も不要、とにかくスクリーンを見ていればそれだけで論点が指摘され、ドラマタ劇を楽しんだ後にはそれなりのハッピーエンドが待っているという予定調和的な作

りになっている。それはそれで悪くないのだが、そんな邦画ばかりでいいの・・・？

そんなふうに考えると、本作はそんな近時の邦画とは全く異質だ。説明不足だからとにかくわかりにくいし、主人公のジョーはもちろん、人身売買組織に囚われた少女ニーナ（エカテリーナ・サムソノフ）のセリフもほとんどないから、セリフから状況を理解することもほとんど期待できない。さらに、本作特有のアクションシーンも前述のとおりアップが多用される上、何のために何をしようとしているのかのパノラマ的映像が全くないから、とにかく全体像がつかみにくい。もちろん、リン・ラムジー監督はあえてそんな映画作りと俳優への演出をしているわけだが、さて、そんな映画にカンヌは騒然だとしても、日本人観客の反応は・・・？

ちなみに、私は瀬々監督の『友罪』（18年）『菊とギロチン』（18年）等の問題作にもっと観客が集まってもらいたいと考えているが、カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞した是枝監督の『万引き家族』（18年）は例外として、『友罪』『菊とギロチン』のようなクソ鋭い映画の集客はイマイチというのが現実だ。

■□■こんな仕事が本当に？彼のトラウマは？■□■

近時観たメル・ギブソン監督の『ハクソー・リッジ』（16年）は第二次世界大戦における沖縄の「ハクソー・リッジの戦い」での良心的兵役拒否をした衛生兵のヒーローぶりを描いた映画（『シネマ40』160頁）。また、『ホース・ソルジャー』（18年）は、2011年の9.11世界同時多発テロ直後のアフガニスタン北部における米特殊部隊の活躍を描く映画だった。このようにハリウッドでは「アメリカ万歳」的な戦争映画も多いが、他方、クリント・イーストウッド監督の『アメリカン・スナイパー』（14年）（『シネマ35』24頁）のように、イラク戦争で受けたPTSD（心的外傷後ストレス障害）で苦しむ兵士を主人公にした傑作もある。さらに、ベトナム戦争を否定的な題材として描いた名作も多い。

しかして、元海兵隊員で今でもそれなりの体力維持に気を配っているジョーの仕事は行方不明者の捜索を請け負うスペシャリストだが、今どきアメリカにそんな仕事が本当にあるのか？ かつて海兵隊員として派遣された砂漠の戦場や、FBI潜入捜査官時代に目の当たりにした凄惨な犯罪現場の残像は、いまだにジョーの頭にこびりついて離れない。父親の理不尽な虐待にさらされた少年時代のトラウマもあるらしい。もっとも、これはジョーの口から全く説明されないの、パンフレットのストーリー紹介に書いてあることをそのまま流用しているが、スクリーン上で最初に見せる少女ニーナの救出劇は実際にお見事だ。つまり、彼は①まずヴォット議員（アレックス・マネット）から受け取った住所「東31丁目235番地」の下見を済ませて必要な物資を調達し、②組織の使いっ走りの若いチンピラを誂め上げて用心棒の人数やエントランスの暗証番号を聞き出し、売春が行われているビルの内部に潜入していき、③2人の用心棒と客の男たちを叩きのめせば、ニーナの救出はそれでおしまいだ。これでいくらの報酬を貰えるのかは知らないが、ホテルの部屋に

備え付けられたテレビのニュースで落ち合う予定だったヴォット議員が高層ビルから飛び降り自殺したというニュースを聞いたジョーはビックリ！雇い主が死んでしまったら報酬はどうなるの？そんな心配をしている（？）ジョーに対しては、さらなる災難が降りかかり、部屋を訪れた2人組の私服警官がホテルの受付係の男を射殺し無理矢理ニーナを連れ去ってしまったから、ジョーはさらにビックリだ。

ワケがわからないまま何とか窮地を脱したジョーは、ヴォット議員からの依頼を仲介したマクリアリー（ジョン・ドーマン）のオフィスを訪れたが、ワケがわからないのはジョーばかりではなく、私たちも同じだ。次々とスクリーン上に展開されるこれらの出来事の一つ一つ追いかけていっただけで私たちは精一杯。そんな中で彼が心の中に抱えていたトラウマが少しずつ明らかになっていくとともに、ニーナという少女のトラウマも……。さらに、雇い主だったヴォット議員の“ワルぶり”も少しずつ。しかし、真のワルが誰かわからないがジョーがいつも気にかけていた年老いた母親（ジュディス・ロバーツ）まで殺してしまう必要があるの……。？ジョーを襲うワルのやり口はちょっと理不尽すぎるのでは……。？その点でも、本作のバイオレンスぶりはハッキリ言ってワケがわからないが、ただその展開に目が釘付け状態に……。

■真のワルは誰？上院議員も州知事もワル……。？■

第90回アカデミー賞は、13部門にノミネートされていた『シェイプ・オブ・ウォーター』が、「作品賞」「監督賞」「美術賞」「歌曲賞」の最多4部門を受賞したが、同作では水中シーンの美しさが際立っていた。大アマゾンの半魚人は水棲動物だが、半魚人と友達になった、声を失くした孤独な中年女・イライザは人間だから、水の中で生きていけないのは当然。そのため、同作ラストは……。？本作後半には、自分の仕事に巻き込まれたことによって母親が殺されたため、生きていくことに絶望したジョーがポケットにいったい石を詰め込んで母親の遺体と共に湖の中に潜ってゆく『シェイプ・オブ・ウォーター』と同じようなシークエンスが登場するので、それに注目！『西郷どん』では、京都から薩摩にお連れした月照和尚と共に、海の中に飛び込んだ西郷吉之助は奇跡的に助かったが、これは大久保一蔵らの救助によるもの。それに対して本作では、ジョーは湖底へ沈みゆくさなかにニーナの幻影を見たことによって自分の意思で湖の上に引き返していくことに。そこでジョーが見いだした“生きる理由”は「真のワルを叩くこと」だ。

しかして、本作における「真のワル」は誰？それは、一連の事件の黒幕であるウィリアム州知事だ。つまり、ニーナはウィリアムのお気に入り、ヴォット議員は常日頃自分の出世のために娘を政界の権力者に貢いでいたというわけだ。こう考えると、アメリカは上院議員も州知事もロクなヤツがいないが、それは日本も同じようなもの……。？それはともかく、自分が命をかけて倒すべき「真のワル」がウィリアム州知事だとわかったジョーのその後の行動は一貫したものになる。そこで彼が手に持つ武器は何と、片手でも使える

金づちのような小型のハンマー。こりゃ、パク・チャヌク監督の韓国映画『オールド・ボーイ』(03年)で名優チェ・ミンシクが見せたハンマー・アクションと同じだ(『シネマ6』52頁)。しかして、本作クライマックスで、ニーナが監禁されているウィリアム州知事の郊外の豪邸に単身踏み込んだジョーが見せる、血なまぐさいパフォーマンスは如何に・・・？

2018(平成30)年6月8日記